4及び次節を参照。建物は掘立柱建物のみで総柱式が3分の1以上を占める。建物の配置は数棟からなる建物群が散在した形態である。建物規模は特大型2棟，大型4棟，中型8棟・小型7棟である。冒頭でも触れたが中世面は現況の条里地割が遺構に合致した部分や，地割りと同じ主軸方位の建物が多くある。遺跡の性格としては有力農民層と下級農民層が一体となった村落と考えられる。

E　五社遺跡古代後期集落の性格

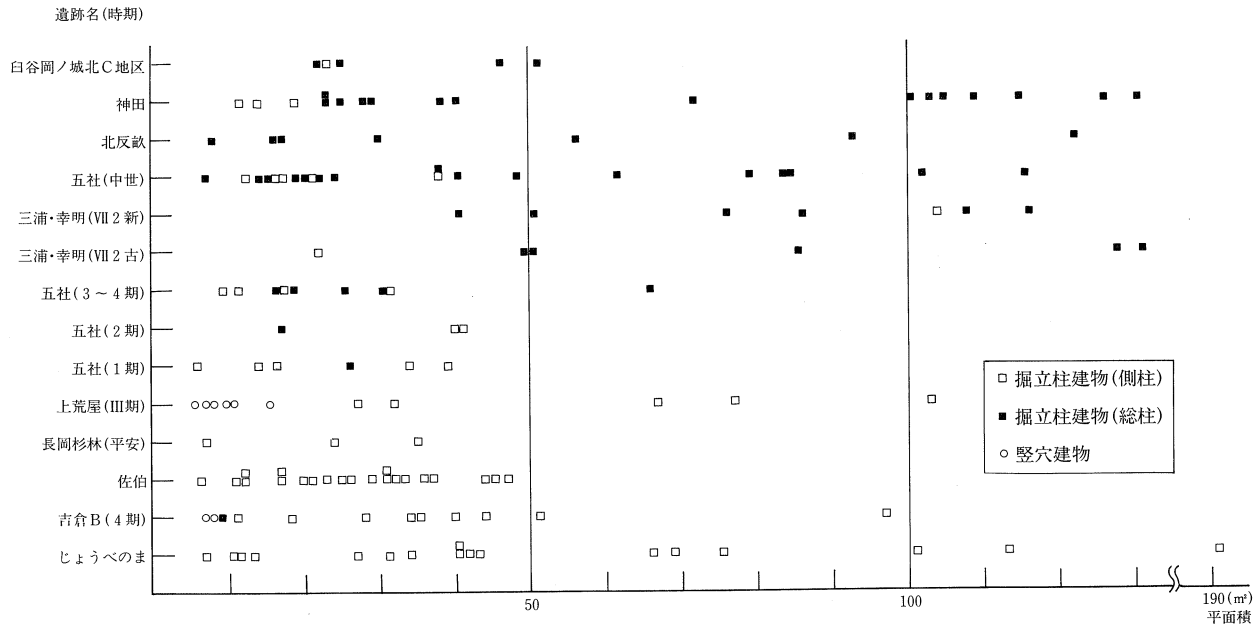
前項で五社遺跡古代後期との対比するため古代後半から中世初頭の集落をみてきた。これらの集落の性格は一般村落・開発拠点(領主)・荘家の3タイプにわけられる。この3タイプについて建物規模・機能，建物配置，条里地割について五社遺跡と比較してみたい。

建物規模・機能については一般村落は古代の佐伯遺跡・長岡杉林遺跡のように小型・中型で構成され，中世の臼谷岡ノ城北遺跡も同様である。開発拠点（開発領主）は古代の吉倉B遺跡では特大型に近い97.44m²を主屋とし，中世の神田遺跡・北反畝遺跡・五社遺跡中世面では確実に特大規模のものが主屋となっている。荘家のじょうべのま遺跡・上荒屋遺跡では主屋は特大型の掘立柱建物である。じょうべのま遺跡では191m²の建物が主屋となる。五社遺跡古代後期の建物は3・4期のＳＢ28だけが66.2m²で大型で，主体は中・小型が主屋となり，一般村落に近い。

石川県内の古代の掘立柱建物を研究した川畑誠氏によれば五社遺跡古代後期の時期前後は次のように変遷していく。10世紀中頃から11世紀前半は居住用の建物については側柱掘立柱建物が衰退し総柱掘立柱建物が普及した時期で，11世紀中頃～12世紀前半は総柱掘立柱建物を中心とした建物構成に転換した時期とされる[注12]。これは五社遺跡でも同様の転換が認められる。

一般村落の建物配置は古代・中世の3遺跡とも建物5，6棟が集中した建物群の形態である。開発拠点は100m²前後の主屋を中心とした，5～6棟前後の建物群が規則性を持った配置である。周辺に小規模な建物群が付属する例もある。荘家の配置は集中するが，コの字状のものがみられる。北陸の古代集落を分析・研究した宇野隆夫氏は10世紀初め～11世紀初めは再び建物小群が顕在化する時期とし，集落構造が分散的あるいは小規模化した時期としている[注13]。五社遺跡古代後期の建物の配置は30mから80mも離れかなり散在しており，宇野氏の説どおりの建物配置である。

古代後半から中世前半にかけては条里地割との関連が問題となってくる。しかし，発掘調査で検出



第219図　古代後期・中世前期集落の建物面積

された例は乏しい。現在のところ北陸最古のものは上荒屋遺跡の条里溝である。中世に北反畝遺跡及び五社遺跡中世面では現在も地表面に残存する条里型地割に合致する溝が認められている。金田章裕氏によると10～12世紀は，荘園整理令がたびたび出され，免除領田制を始めとする土地管理の基礎となる条里プランが重要となり，坪の区画が意識される時期であるとする[注14]。これは五社遺跡古代後期の時期と合致しており，溝などの遺構が条里地割である可能性を補強する。また，各時期の建物もこの方格に合致した溝に主軸を合わせており，「条里村落」に当たると思われる。

北陸以外の他地域の条里村落の状況を次にみる。畿内の古代集落を研究した広瀬和雄氏によると，10世紀後半～11世紀初には条里制の施行された地域に単独の建物群が一つの集落として存在し「条里村落」の出現時期であるとしている[注15]。これは北陸でも同様な状況が認められる。また広瀬氏はさらに10世紀後半から11世紀の集落景観を農民層・小規模経営農民層・富裕層の３つに分類している[注16]。この説をそのまま北陸にあてはめるのは難しいかもしれないが，農民層及び小規模経営農民層は一般集落に，富裕層は開発領主にそれぞれなるのではないかと思われる。以上をもとに，五社遺跡古代後期にみられる遺構は広瀬氏の「農民層（Ａ型）」及び「小規模経営農民層（Ｂ型集落）」に当たるのではないかと考えられる。

再び，五社遺跡古代後期について考えれば，古代後期の集落は北陸では例の乏しかった条里地割が伴う小規模な建物群が散在した新しい型式の集落である。この集落はそれぞれが単独で存在していたのではなく，開発領主（富裕層）のもとで条里地割の水田を耕作していたと考えられる。このことは輸入磁器や国産陶器，コロバシの出土によって想定される。

Ｆ　ま　と　め

以上の様に検討をしてきたが，最期に五社遺跡古代後期集落について次のように箇条書きにしてまとめとしたい。①五社遺跡古代後期の集落の性格は一般村落（農民層または小規模経営農民層）と考えられる。②十字形の溝や直線的な溝などは条里地割の可能性が高い。③条里地割が伴う一般村落（条里村落）とすれば北陸では貴重な遺跡である。

（岡本淳一郎）

注１　岡本淳一郎　1995　「五社遺跡古代上層面の集落構造について」『埋蔵文化財年報(6)　平成６年度』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
注２　金田章裕　1971　「条里制」『小矢部市史』上巻
注３　富山県教育委員会　1974　『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　井波町高瀬遺跡・入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書』
　　入善町教育委員会　1975　『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要』(3)
注４　富山県教育委員会　1979　『富山県魚津市佐伯遺跡発掘調査概要』
注５　富山県埋蔵文化財センター　1993　『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(3)　任海遺跡・吉倉Ａ遺跡・吉倉Ｂ遺跡』
　　富山県埋蔵文化財センター　1994　『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(4)　吉倉Ｂ遺跡』
注６　富山市教育委員会　1987　『長岡杉林遺跡』
注７　金沢市教育委員会・上荒屋西部土地区画整理組合　1993　『金沢市文化財紀要106　上荒屋遺跡Ⅱ』
注８　松任市教育委員会・松任市三浦・幸明地区土地区画整理組合　1996　『松任市三浦・幸明遺跡』
注９　小矢部市教育委員会　1990　『小矢部市埋蔵文化財調査報告書第30冊　富山県小矢部市　北反畝遺跡－条里遺構の発掘調査概要Ⅱ－』
注10　小矢部市教育委員会　『小矢部市埋蔵文化財調査報告書第34冊　富山県小矢部市　臼谷岡ノ城北遺跡発掘調査概要－臼谷地区土地改良総合整備事業に伴う発掘調査－』
注11　上市町教育委員会　1981　『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町遺構編－』
注12　川畑誠　1995　「石川県内の古代建物に関する基礎的考察－掘立柱建物の平面プランを中心にして－」『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報６　平成６年度』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会
注13　宇野隆夫　1991　『律令社会の考古学的研究　北陸を舞台として』　桂書房
注14　金田章裕　1993　『古代日本の景観』　吉川弘文館
注15　広瀬和雄　1989　「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集　国立歴史民俗博物館
　　広瀬和雄　1990　「古代の農村」『日本村落史講座２　景観Ⅰ　原始・古代・中世』雄山閣
注16　注15と同じ。

5　五社遺跡中世集落の構造

A　はじめに

五社遺跡の上層では，第Ⅳ章遺構・遺物で報告したように，中世前期を中心とする集落が発掘された。ここでは集落構造の諸特徴を総合的に確認し，若干の考察を加えることにする。もとより道路幅だけの限られた調査であるため，五社遺跡集落の全体像が明らかにされたわけでもなく，また建物構造（特に上屋構造）の復原や出土遺物からの詳細時期の比定など基本的な事項について不十分なものであるため，どれほど問題の核心に触れ得るか疑問ではあるが，今後の研究の一助になればと思う。

B　掘立柱建物群の群別と分布

五社遺跡中世面の調査区は幅約70ｍ，全長約500ｍ，面積約35,000㎡にわたって発掘された。発掘された掘立柱建物群は，平成元～３年に調査された福光町梅原胡摩堂遺跡[注1]のように長さ数キロメートルにわたって延々と続くものではなく，分布集中域とその間の空白地域，あるいは谷部・川跡などの自然地形に区切られて，いくつかの群に分けられる。この建物群については次のようにＡ～Ｇの７群に群別する（第220図）。

Ａ群　Ａ地区からＢ１地区の北東部に分布する掘立柱建物群で，ＳＢ38～ＳＢ50の13棟からなる。確認された建物数および占有面積は最大である。分布域の南西側は，北流する自然流路ＳＤ43で画される。比較的分布の密度は低いが，重複する建物は４組８棟ある。

Ｂ群　Ｂ２Ｅ地区からＢ３地区北東部に分布する掘立柱建物群で，ＳＢ51～ＳＢ56の６棟からなる。分布の密度は低く，建物間の距離がかなり大きい。建物群の西側は小規模な自然流路ＳＤ2001や谷部（ＳＤ2007）で画される。またＳＢ48・ＳＢ49の南および西側には建物を個別にＬ字状に区画する小規模な溝がある。建物群はさらに東側に広がると考えられる。

Ｃ群　Ｃ１地区の東側から南側にかけて分布する掘立柱建物群で，ＳＢ57～ＳＢ62の６棟からなる。細かくみると北側Ｃ１群（ＳＢ57）と南側Ｃ２群（ＳＢ58～ＳＢ62）の２群に細群別できるかもしれない。北群は単独であるが，南群は重なり合い，３時期以上にわたる。建物群を区画する溝等は確認されておらず，建物群域はさらに西側に広がる可能性がある。

Ｄ群　Ｃ２地区の中央東側に分布する掘立柱建物群で，ＳＢ63・ＳＢ64からなる。２棟は重なり，分布の中心はさらに東側に広がるものと考えられる。建物あるいは建物群を区画する溝や流路もなく，小規模な建物群の可能性が強い。

Ｅ群　Ｃ３地区の南側に分布する掘立柱建物群で，ＳＢ65～ＳＢ71の７棟からなる。これらはさらに北側Ｅ１群（ＳＢ65～ＳＢ67），中央Ｅ２群（ＳＢ68～ＳＢ70），南側Ｅ３群（ＳＢ71）に細群別できる。Ｅ１・Ｅ２群はそれぞれ３棟の重なりがある。Ｅ２群の南側には東西方向の道路がある。建物群の分布密度は比較的高い。

Ｆ群　Ｄ１地区南側からＤ２地区北側に分布する掘立柱建物群で，ＳＢ72～ＳＢ81の10棟からなる。Ｃ３地区から続く東西方向の道路を挟み，北に２小群，南に１小群が分布する。北側Ｆ１群（ＳＢ72）は１棟が少し離れて建ち，中央Ｆ２群（ＳＢ73～ＳＢ78）は３棟が重なり，道路南側のＦ３群は３棟単独時期である。Ｆ群の東側はＳＤ8043あるいは谷部で区切られ，Ｆ３群はさらに，西・南側を細い溝ＳＤ9117でＬ字状に区画する。建物群の分布密度は比較的高い。

Ｇ群　Ｄ２地区に分布する掘立柱建物群で，ＳＢ82～ＳＢ85の４棟からなる。２棟が重なる他は単独に建つ。建物群の東側は谷部で，西・南側はＳＤ9005・ＳＤ9006・ＳＤ9007などの自然流路で区切

られる。個別建物では，ＳＢ83・ＳＢ84を溝ＳＤ9128・ＳＤ9129が方形に区画する。

五社遺跡の中世掘立柱建物群は平面的に，以上のように７群に群別され，そのうちのいくつかはさらに細群別できる。中世集落の出現に約50～75年さかのぼる古代後期（平安時代）の掘立柱建物群との位置的な重なりでは，古代Ａ群が中世Ａ群に，古代Ｂ・Ｃ両群が中世Ｂ群に，古代Ｄ群が中世Ｃ群に，古代Ｅ群が中世Ｄ群に，古代Ｆ・Ｇ群が中世Ｅ群にほぼ対応する。

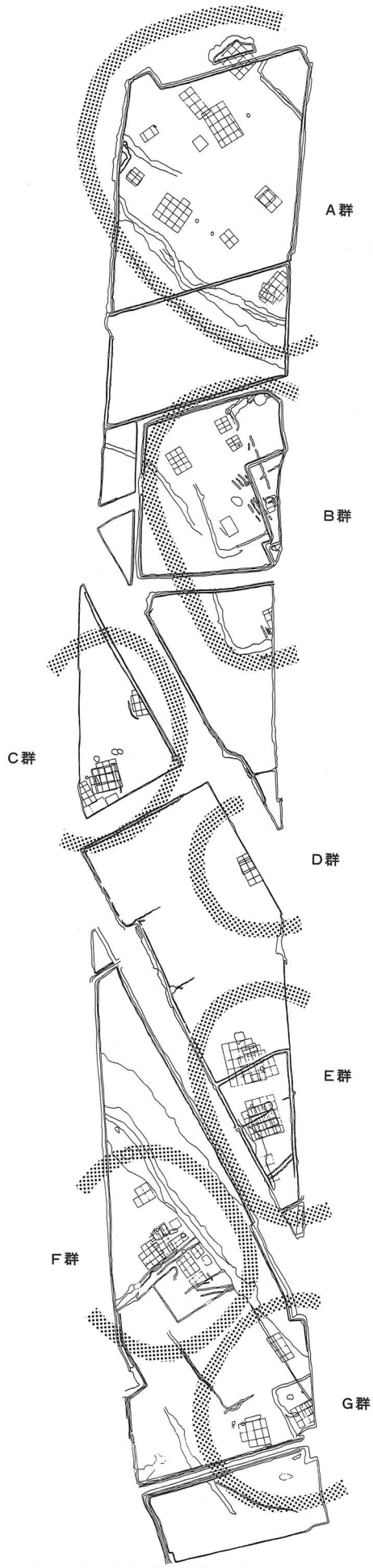
Ｃ　建物の規模

五社遺跡の建物規模，特に平面積については，建物長軸の長さ×短軸の長さで表している。建物の検出が一部に限られる場合を除き，この数値の分布をグラフにすると第221図左のようになる。これをみると，建物群間に建物規模別の構成にかなりの差が認められる。そこで，建物規模30㎡未満を小規模建物，30㎡以上～100㎡未満を中規模建物，100㎡以上を大規模建物と便宜的に区分し[注2]，各建物群ごとにその特徴をまとめると次のようになる。

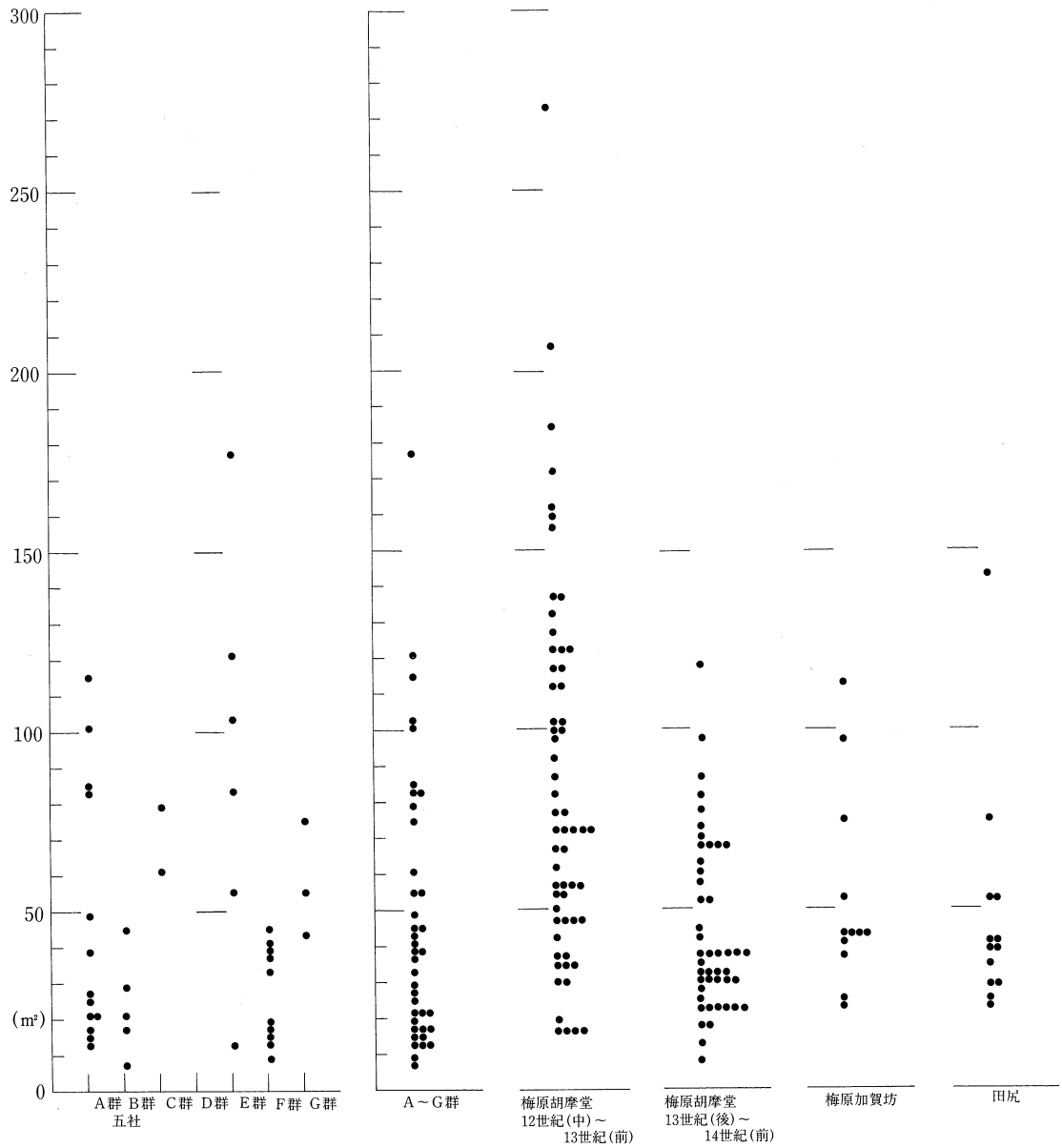
とりあえず時期区分を考慮しなければ，Ａ群は大規模建物２棟＋中規模建物４棟＋小規模建物７棟，Ｂ群は中規模建物１棟＋小規模建物４棟，Ｃ群は中規模建物２棟，Ｄ群は全体のわかる建物がないが，中規模以上が１棟，Ｅ群は大規模建物３棟＋中規模建物２棟＋小規模建物１棟，Ｆ群は中規模建物５棟＋小規模建物５棟，Ｇ群は中規模建物３棟からなる。建物規模からみると，大規模建物が含まれる，Ａ群・Ｅ群が中心的建物群と考えられ，中規模建物が中心となるＣ群・Ｇ群がこれに次ぎ，中規模でも50㎡以下がほとんどで，小規模建物が多いＢ群・Ｄ群？・Ｆ群が小規模建物群となる。

時期区分と建物群変遷に基づき，同時存在した建物の群構成を明らかにした上で比較検討する必要があるが，建物群間にみられるこのような建物規模の構成の差は，そこに居住する人々の身分や性格を反映しているものと考えられる。

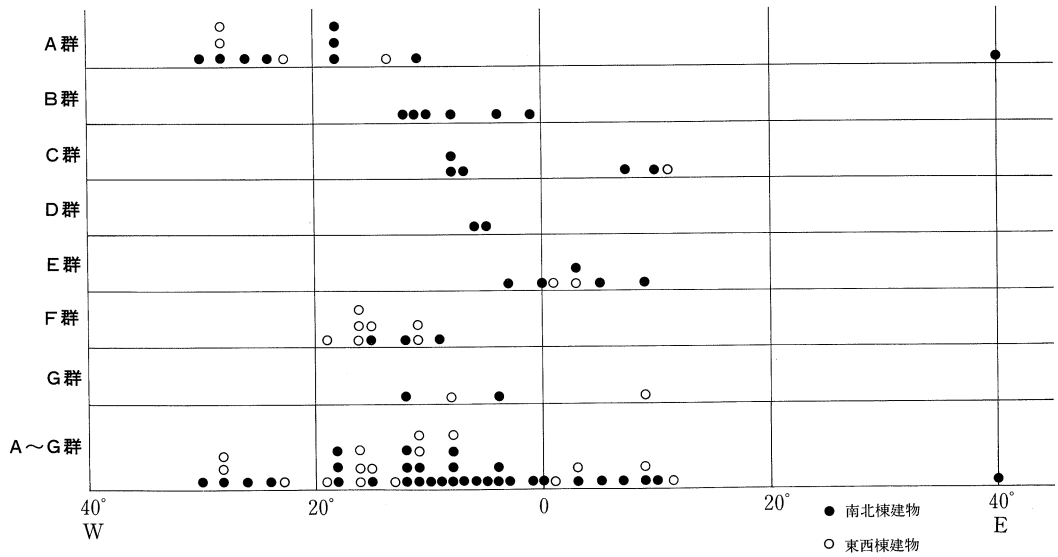
五社遺跡における中世前期（12世紀後半～14世紀）の建物規模について，他遺跡の例と比較してみると（第221図），大規模あるいは特大規模の建物が目立つ福光



第220図　掘立柱建物群の分布



第221図　掘立柱建物の規模分布



第222図　掘立柱建物の主軸方位の分布

町梅原胡摩堂遺跡の12～13世紀前半建物群との違いは明らかであるが，同じく梅原胡摩堂遺跡の13世紀後半～14世紀前半建物群とは比較的似た傾向を示し，サンプル数は少ないが，梅原加賀坊遺跡や田尻遺跡なども同じ構成とみることができよう。おそらく中世集落としてはごく一般的なあり方としてとらえることができる。なお棟方向については，全49棟の内，南北棟33棟(67%)，東西棟16棟(33%)となり，南北棟建物が卓越する。この傾向は梅原胡摩堂遺跡でも同じで，砺波平野特有の西風や，東からの太陽光線の取り入れに関連するとみられている[注3]。

D　建物の方位

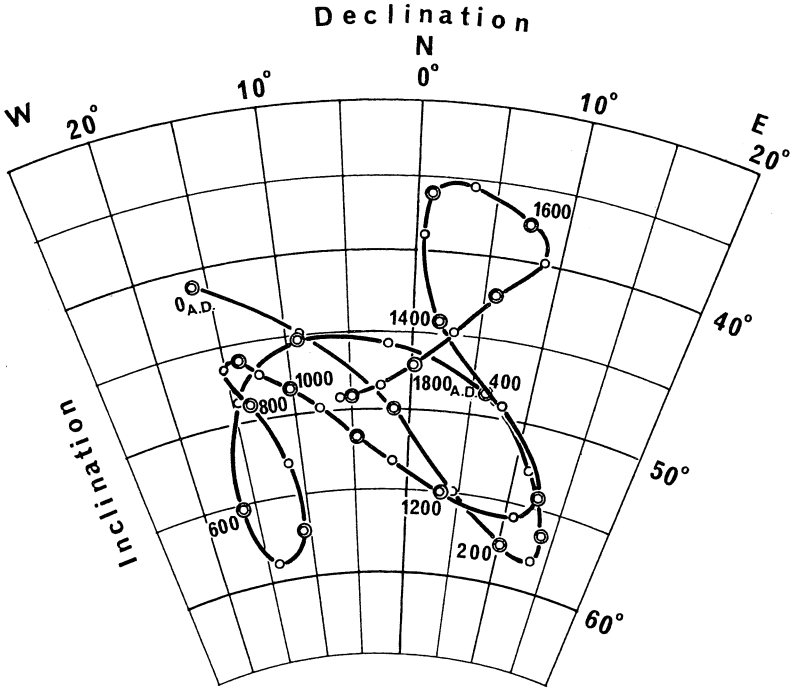
つぎに建物方位について検討する。南北棟建物を基本とし，長軸の中心軸を建物の方位とし，これの真北からの東西への振れの分布をグラフにすると，第222図のようになる。なお東西棟建物については90°変換した数値を用いている。これをみると建物各群により方向や集中度合いにかなりの差があることがわかる。各群の特徴を細かくみると次のようになる。

A群はＳＢ50を除き，その他全体が11度～30度西に振れる。ＳＢ50を除く平均値は西偏22.9度で，建物群の中では最も西に振れるグループである。ＳＢ49と重なるＳＢ50は，建物方位が大きくずれ，掘立柱建物群A群の主体的な時期から外れる可能性が高い。B群は比較的まとまりが良い。１度～12度西に振れ，平均値は西偏7.7度である。特にB群北側に位置するＳＢ51～ＳＢ53は，ほとんど差がなく，一体的に計画配置されたものとみられる。C群は，西に７度～８度振れるＳＢ61～ＳＢ63のグループ（仮にＣ１群とする）と，東に７度～11度振れるＳＢ57～ＳＢ59のグループ（仮にＣ２群とする）に二分できる。前者の平均値は西偏7.7度，後者は東偏9.3度でそれぞれのグループではほとんど差がない。全体の平均値は東偏0.8度である。

D群は２棟しかないが，西に５度～６度振れ，集中度は高い。平均値は西偏5.5度である。E群は西に３度振れるＳＢ69を除き，東に１度～９度振れる。全体にまとまりが良く，平均値は東偏３度である。F群は非常にまとまりが良く，西偏９度から19度までに10棟が納まる。平均値は西偏14度であり，A群に次いで西偏度が大きい。東西道路に面して計画的に建物配置がなされたことが窺える。G群は西に４度～12度振れるＳＢ82～84のグループと，東に９度振れるＳＢ85の２群に分かれる。全体にややまとまりを欠き，平均値は西偏3.8度である。

以上建物群ごとにみてきた建物方位は，平均値からではあるが，西偏の強いA群・F群のグループ，真北から数度西偏するB・Ｃ１・D・G群のグループ，真北から数度東偏するE群，東偏の大きいＣ２群に分けられる。

古代末から中世前期にかけての考古地磁気の研究成果によれば[注4]，西南日本における地磁気永年変化－特に



第223図　西南日本における地磁気の永年変化曲線

偏角の変化をみると，12世紀中葉に真北を横切ったあと，徐々に東に振れ，1300年頃に東に13度程振れてピークを迎えたあと，再び西にもどり，1400年頃には真北近くになるという（第223図）。地磁気永年変化については，地域による補正曲線の必要性も指摘されているが[注5]，12世紀から13世紀にかけて地磁気偏角が西から東に変化していく様子が窺える。

仮に本遺跡の掘立柱建物群が，磁北を目安に建物配置を行ったとすれば，相対的にではあるが，西偏の強いグループが古く出現し，東偏するグループが後出的であるとしうるかもしれない。しかしながら，第223図の永年変化曲線と比較すると，10～20度以上も西偏が激しく，またA地区ＳＢ45で確認された大地震による地層の逆時計回り水平移動の影響や，自然地形（流路）の方向の影響なども考えられ，こちらの方の影響も無視できないものがある。

E　掘立柱建物群の変遷と存続期間

掘立柱建物群は，それぞれに建て替え回数や密集度が異なる。次に各群ごとに建物変遷と出土遺物に基づく年代比定を試みる。

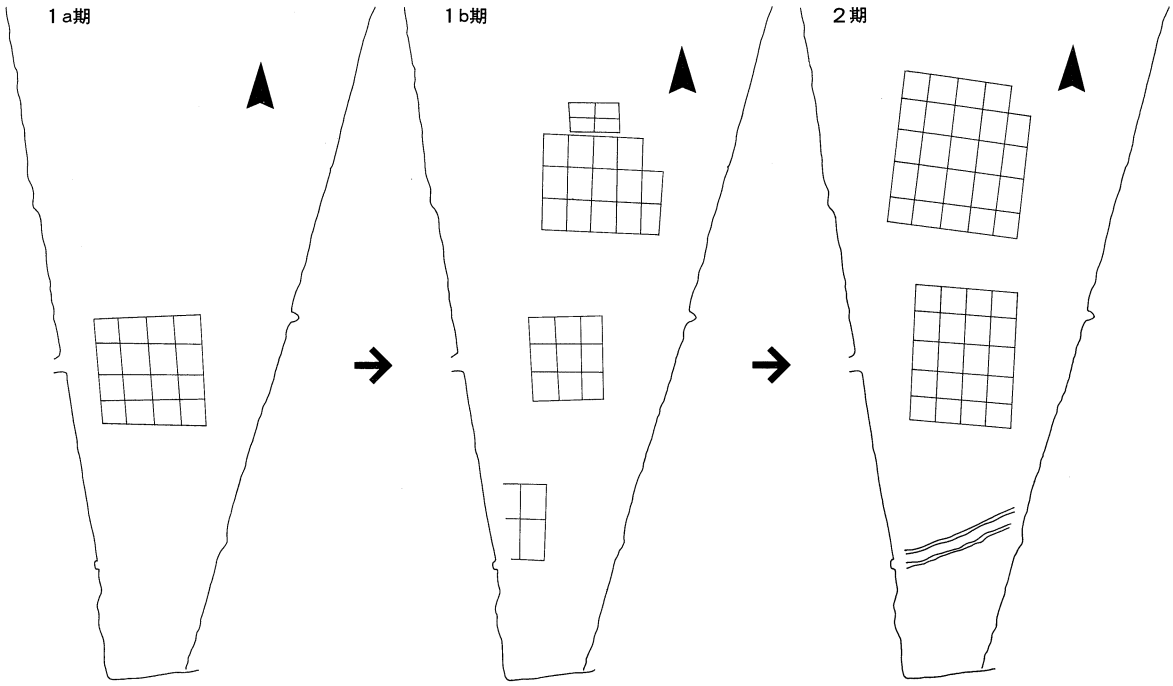
A群　ＳＤ46の北西側に13棟あり，そのうち４組８棟が２棟ずつ重なる。最低でも２時期に分けられるが，全体に間隔を空けて分布し，柱穴の重なりがないため，具体的な群別と変遷を示すことが出来ない。出土遺物をみると，珠洲Ｉ～II期の遺物，中国製白磁碗IV・Ｖ類，中世土師器皿NDII類などが全体的に出土し，おそらく集落群の主体的な時期は12世紀後半から13世紀代に納めることができる。建物のうち，極端に方位のずれるＳＢ50は，周辺から中世土師器皿NJ類が出土しており，この時期まで下がるかもしれない。またＳＤ46は，中世前期の遺物も多いが，珠洲IV期・中国製青磁Ｄ類・中世土師器皿NJ類なども出土しており，集落廃絶後も存続した可能性が強い。

B群　ＳＢ52・53が隣接する他は散在しており，時期区分が不可能である。とりあえず同一時期として捉えておく。遺物はあまり多くなく，珠洲はＩ～Ｖ期の遺物，中世土師器皿はNC・NDII・NJ類など時期幅もある。そこで建物群の時期は，建物の区画溝ＳＤ3087・4001から出土した珠洲Ｉ・II期の擂鉢，中世土師器NC類を重視して，13世紀代と考えておきたい。

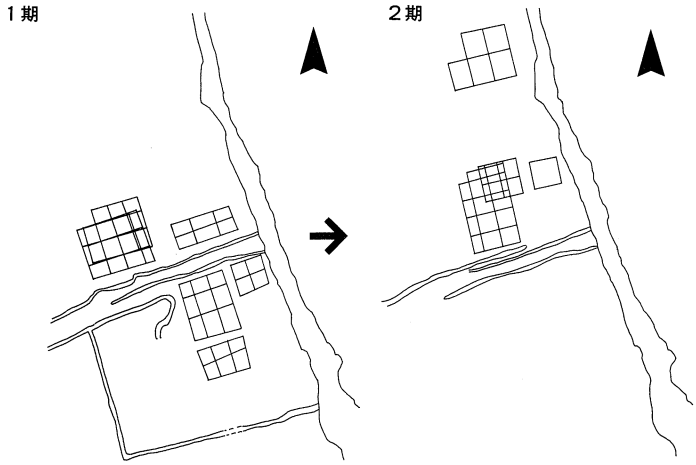
C群　まず建物群の方位からみれば，前述したようにＣ１群とＣ２群の２時期に大別できる。仮に建物主軸の方位の変遷を地磁気永年変化曲線に照らして，Ｃ１群→Ｃ２群としておくと，それぞれ建物群に２時期認められ，２時期４小期の変遷が推定できる。Ｃ１群の変遷は不明であるが，Ｃ２群については，柱穴の重なりや雨落ち溝の共通点などから，ＳＢ57・58→ＳＢ59の変遷が考えられる。それぞれの時期は，出土遺物が少なく明確でないが，Ｃ１群については，珠洲II・III期の擂鉢から13世紀代，Ｃ２地区は14世紀代と推定しておく。

D群　ほとんど方位が変わらない２棟が重なる。柱穴の重なりはおろか，区画溝もなく建物変遷は不明確である。出土遺物はほとんどが包含層からのもので，珠洲Ｉ～IV期までの遺物，中国製白磁碗II・IV類，中世土師器皿NDII・ＮＤIII類などがある。建物群自体は限られた時期の中で納まるものであろうが，出土遺物からの時期限定は困難で，13～14世紀と幅を持たせておきたい。

E群　北からＥ１・Ｅ２・Ｅ３の３群に細分できる。Ｅ３群は１棟のみであるが，Ｅ２・Ｅ３群は建物の重なりからそれぞれ２～３時期に区分できる。柱穴の切り合いからＳＢ69・70→ＳＢ68の前後関係が認められる。磁北の変化と同じく建物主軸方位が西から東に振れていく傾向を示す。これを手がかりに，建物群の時期区分を行うと，建物主軸が真北付近のＳＢ66・67・69・70・71のグループ（第１期）と，少し東に振れるＳＢ65・68のグループ（第２期）に大きく分けられる。第１期群はさらに，方位のわずかな差により，２小期（２－Ａ・Ｂ）に区分するが，柱穴の切り合いがなく，不確実なも



第224図　E群掘立柱建物変遷図



第225図　F群掘立柱建物変遷図

のである。これらを建物配置変遷図にすると第224図上のようになる。

建物の実年代を出土遺物からみると，柱穴からは珠洲のⅠ～Ⅱ期の甕や四耳壺，ロクロ成形土師器皿R類などが出土し，周辺包含層からも珠洲Ⅰ期の甕や擂鉢，中世土師器皿NBⅠ類・NDⅡ類・NDⅢ類，中国製白磁碗Ⅳ類・同青磁碗Ⅰ類3・同青磁皿Ⅰ類2・同青白磁皿などが出土している。15～16世紀にまで下がる中世土師器皿NJ類や中国製白磁皿E群などもみられるが，掘立柱建物群の時期はおそらく12世紀後半から13世紀前半に納まるものと考えられる。

F群　東西道路を挟んで北側にF1・F2の2小群，南側にF3の1小群が分布する。ここでも柱穴の切り合いはほとんどなく，建物主軸方位の振れを手がかりに時期区分を行う。第1期は西偏15～20度の，F2群SB75・76・78とF3群が該当する。SB75と76は建て替えられており，さらに2小期に区分できそうであるが，前後関係の手がかりはないので一括しておく。この時期F2群の南側道路

側溝はＳＤ8056と推定される。第２期はわずかに東に振れ，西偏10度前後のＦ１群とＦ２群ＳＢ72～74が該当する。この群もＳＢ73と74は建て替えられており，さらに２小期に区分できそうであるが，前後関係の手がかりはないので一括しておく。またＦ２建物群が若干北側に移動しており，南側を限る道路側溝はＳＤ8122に移ると考えられる。建物群の変遷は第224図下に示す。

遺物から建物群存続年代を探ると，掘立柱建物群とその周辺からは珠洲Ⅱ～Ⅳ期の擂鉢，中世土師器皿ＲＡⅠ類・ＮＣⅠ類・ＮＣⅡ類・ＮＣⅢ類・ＮＤⅠ類・ＮＤⅡ類・Ｇ類，中国製白磁皿Ⅵ類１ｂ・同青磁碗Ⅲ類２などが出土しており，やや時期幅がある。掘立柱建物群の時期限定は困難で，12世紀後半から14世紀前半と幅を持たせておきたい。

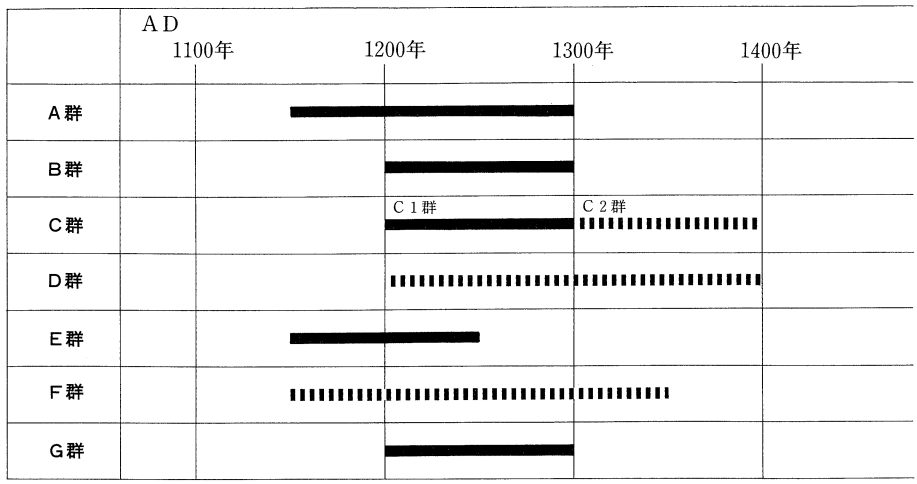
Ｇ群　方位からは，建物主軸方位が西偏するＧ１群ＳＢ82～84と，東偏するＧ２群ＳＢ85の二群に分けられる。方形区画溝ＳＤ9128・9129に囲まれた内部にあるＳＢ83・84が重なる他は，間隔を持って建つ。Ｃ地区と同様，建物群変遷はＧ１群→Ｇ２群となるかもしれない。

遺物は珠洲Ⅰ～Ⅴ期の甕や擂鉢，中世土師器は非ロクロ成形の各種の皿，中国製白磁碗Ⅴ類４・同青磁碗Ⅰ類5bなどが出土しており，やはり時期幅がある。しかしながらＳＢ85の北側に隣接する土坑からは13世紀代の遺物がまとまって出土し，全体的にみても13世紀代の遺物が目立つ。建物群の存続年代については一応13世紀代とおさえておきたい。

以上Ａ～Ｇ群の掘立柱建物群についての存続期間を地区ごとにまとめると，不確実な期間については波線で示して，第225図のようになろう。五社遺跡集落は最初12世紀後半にＡ群・Ｅ群・Ｆ群で成立し，13世紀代にはＡ～Ｇ群が並存する。14世紀代にはいると不確かながらＣ２群・Ｄ群・Ｆ群で継続していたとみられるが，14世紀後半にはほとんど廃絶してしまったものと思われる。その後15世紀以降も遺物は散漫に出土していることから，周辺地区も含めて，集落が存続した可能性はあるが，発掘区域の中では明らかにできなかった。

Ｆ　自然災害痕跡と集落

庄川扇状地扇端部に立地する五社遺跡の中世集落では洪水の被害を受け，さらに大地震による様々な被害の様子も明らかにされた。特に古代後期面と中世面を分ける，洪水時の堆積物とみられる広範囲に堆積する砂質シルトと砂の互層は，11世紀末から12世紀後半のものであり，中世集落の乗る基盤層を形成している。また遺構の説明でも一部触れたが，ＳＢ45・ＳＥ8058・ＳＫ114・ＳＫ121などにみられる水平方向の断層，その他垂直方向の断層・帯状に走る噴砂跡・傾いた柱穴など様々な大地震の痕跡が残されていた。集落の出現・発展・衰退・廃絶の背景には，もちろん社会的な要因が大きく影響するが，こういった自然災害的な要因も無視できないものである。五社遺跡における自然災害痕跡の分析と人々の生活については，河西健二が詳細に報告しているので，これを参照していただ



第226図　掘立柱建物群の存続年代

きたい[注6]。

G　小　　結

最後に五社遺跡中世集落の性格について若干まとめておきたい。

五社遺跡の位置する小矢部市東北部は，鎌倉時代に糸岡荘として文献にみえる荘域に含まれる。糸岡荘は後堀河天皇の皇女室町院の所領で，福岡町を中心に，砺波市・小矢部市・高岡市の一部を含む広大な荘域が推測されている。正安２（1300）年の室町院の死去後，同４（1302）年に所領分割が行われて，糸岡荘は持明院統の所領となる[注7]。糸岡荘立荘の時期は明らかでないが，鳥羽院政期（1130～1157年）に全国的に数多くの新立荘園が出現したことを考慮すると，おそらく12世紀中にはすでに形成されていたものと考えられる。

以上のような動勢を踏まえて五社遺跡の集落をみると，11世紀末～12世紀後半の間に襲った庄川の洪水で荒廃した田野に，12世紀後半にはＡ群・Ｅ群などで集落が創建されて再開発がはじまる。13世紀代には各建物群が存立するが，14世紀代に入ると衰退しはじめ，15世紀代以降は建物群の確認は出来なくなる。集落の主体的な時期は，12～13世紀といわれる荘園制最盛期に合致し，おそらく糸岡荘の荘域内に展開した集落の一端をなすものと思われる。

集落の性格づけは簡単ではないが，建物規模や配置等からみると，先行して出現し大規模建物が含まれるＡ群・Ｅ群などは，有力農民層の開発拠点としての居住地に比定でき，時期的にやや遅れ，中・小規模建物が多い他の建物群はこれに従属する下級農民の居住地とみることができよう。五社遺跡の集落は，これらが組み合わさって一体となって機能したもので，中世村落の一形態を具体的にみることができる資料として貴重なものである。

また集落全体を概観したとき，各建物群は数十メートルの間隔をあけて単位ごとに立地する傾向にある。村落の形態は塊村形態とはいえず，どちらかといえば散村形態に近いと思われる。このような居住形態が，現在みられるような典型的散居村の形態にスムーズに移行するかどうかは，本遺跡のデーターだけでは明らかでなく，15世紀以降近世にかけての集落分析をふまえる必要があり，今後の研究課題としておきたい。

（山本正敏）

注１　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　1994　『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ－』

注２　以前筆者は中世掘立柱建物の規模を，大規模（100m²以上）・中規模（50m²以上～100m²未満）・小規模（50m²未満）に区分したことがある（後記文献）。その後梅原胡摩堂遺跡などで資料が大幅に増え，また本遺跡での規模分布グラフも考慮し，小規模建物の範囲を下げることにする。また面積が150m²を超える規模のものについては特大建物などとして区別する必要があるかもしれない。
山本正敏　1985　「掘立柱建物について」『じょうべのま遺跡－Ｃ・Ｋ地区の調査－』入善町教育委員会

注３　宮田進一　1994　「第Ⅳ章　まとめ　２掘立柱建物」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ－』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

注４　広岡公夫　1977　「考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向」第四紀研究，vol.15

注５　広岡公夫　1989　「第４章　古代手工業生産遺跡の自然科学的考察－考古地磁気学，古地磁気学の立場から－」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会

注６　河西健二　1993　「五社遺跡調査で思ったこと　１自然災害と五社遺跡」『埋蔵文化財年報（４）』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

注７　大山喬平他　1984　「第二節　荘園の様相」『富山県史　通史偏Ⅱ　中世』富山県

第VI章　結　　語

五社遺跡では平成４年度から６年度まで３年間にわたり，延べ約51,000㎡の発掘調査を行った。遺跡は，庄川扇状地末端部の平野部に立地することから，古墳時代以来，洪水堆積層を間に挟み，何層もの文化層を形成していることが明らかにできた。最後に，時代ごとにこの調査の成果をとりまとめて，調査報告の締め括りとしたい。

五社遺跡最下層の古墳時代層は，遺跡の北端部から発掘された。試掘調査では確認されず，平成５年度に急遽調査を実施したものである。古墳時代集落は自然堤防上に立地して，４棟の竪穴建物と溝・土坑がある。竪穴建物は，方形の掘り込みに，地床炉とカマドを合わせて構築するものが大部分を占める。時期は出土土器から５世紀中頃のものと確認でき，県内はもちろん，北陸地方でも最古段階のカマドを有する竪穴建物群となる。

遺物は甕・小型壺・高坏などが，竪穴建物や土坑から一括資料として得ることができた。須恵器は未だ伴わず，石川県ガマノマガリ遺跡の報告で提示された田嶋明人氏の土師器編年でいえば，古墳時代３様式Ｉ期に対比できるもので，実年代は５世紀中頃が想定できる。富山県内ではこの時期の良好な土器資料が少なく，五社遺跡の資料は，今後富山県内の古墳時代土師器編年の基準資料となろう。また甕の表面に残る煤状炭化物の付着部位や受熱状況の分析から，これらがカマドで使用されたものであることが裏付けられている。

自然流路とみられるＳＤ552は，時期は明確でなく，古墳時代中期と平安前期の間に推定されるものであるが，ここから富山県内では初例の農具「大足」が出土して注目された。大足は転用されて再利用されているが，一部に残る墨書文字の解読は残念ながらほとんど出来なかった。

古代前期として区分したものは，主としてＡ～Ｂ３地区で発掘された，掘立柱建物・道路跡・溝・畠跡などである。掘立柱建物は30㎡以下の小規模なもので，周囲に溝が巡るものや，棟持ち柱列があるものなど，多様な様相を示す。遺物は量的には少ないながらも，須恵器や土師器が出土しており，遺構の時期は９世紀後半から10世紀初めと判断される。畠のさくとみられる溝跡覆土のプラントオパール分析では，イネ科植物が確認されており，この畠が陸稲などのイネ科植物の栽培地であったか，あるいは敷藁や稲藁堆肥などの可能性が指摘されている。

古代後期では掘立柱建物25棟をはじめ，溝・土坑・畠跡などが発掘された。掘立柱建物は調査地のＡ～Ｃ３地区の主として北半～中央部に分布するもので，７群に群別できる。掘立柱建物は溝で区画された中にあり，畠跡が伴うものもある。重複する掘立柱建物は，３時期に区分でき，建物主軸方位は各時期ごとに大きく変化する。掘立柱建物の特徴は，柱穴が小さく，柱間が不揃いなことで，中には地震，洪水等の影響とみられる傾いた柱穴を持つものもある。また側柱建物から総柱建物へと変化する様子もみられ，古代的建物から中世的建物への変化期として捉えることができる。

建物群を区画する溝は大きく４時期に区分できる。縦横に走る溝間の距離が１町（約109ｍ）になることから，これが条里地割りを示すものと考えられる。小矢部市周辺はこれまでも地表面に条里地割りが比較的良好に遺存する地域として知られてきたが，発掘の結果，地割り方向が時期により変化することが確かめられた。すなわち比較的短期間のうちに，何度か地割りのやり直しが行われていることが窺われ，条里地割りの実態に迫ることのできる貴重な資料といえる。おそらく庄川や小矢部川の氾濫による，田畑の大規模な洪水被害がたびたび生じたことが背景にあると考えられる。

遺物は，建物群内部やその周辺で検出される土坑から土師器や黒色土器等が一括して出土する。こ

のような土器埋納土坑は7基あり，出土した土器群は4段階に区分することができる。土器群は形態分析から10世紀末から11世紀後半の年代が与えられ，集落の存続期間もほぼこれに一致するとみられる。土器の主体は土師器椀・皿類で，黒色土器が一定量含まれ，須恵器・土師器煮炊類は非常に少ない。段階ごとの変化をみると，新しくなるに従って，法量が縮小し，単一化するとともに，器種が無台の椀・皿類に限定されてくる。富山県内での平安時代－特に10～11世紀－の土器編年は，資料の少なさもあって，未だ充分なものとはいえないが，五社遺跡での成果が今後の編年研究の出発点となろう。その他に特筆すべき遺物として，東濃産の灰釉陶器・近江産の緑釉陶器・木製農具の「コロバシ」などがある。特にこの時期のコロバシは，県内ではもちろん初めて，全国的にみても数例しか出土例がない貴重なものである。

中世面では掘立柱建物を中心とする集落跡が発掘された。掘立柱建物群は7群に区分され，一部は古代上層面の掘立柱建物群と重なる。掘立柱建物は総柱建物が主体的で，庇付き建物もみられる。建物規模は群ごとにかなりの差があるものの，全体をみれば小規模から大規模まであり，他の中世集落の傾向と大体一致する。建物の密集度も群ごとに差があり，重なりの多い群では3ないし4期に時期区分できる。建物とその周辺敷地を区画する溝も，一部では方形に巡らすが，ない場合もある。また両側に側溝を持つ道路状遺構と，それに面して建つ掘立柱建物群もある。

遺物は珠洲・中世土師器・瀬戸美濃・中国製磁器などの土器・陶磁器類の他に各種の木製品が出土している。時期は古代末～中世全般にわたってあるが，やはり中世前期のものが主体を占める。出土遺物の検討から，掘立柱建物群の時期は，群ごとの存続期間に少し違いのあることがわかった。まず最初に大規模建物を群中に含む，A・E群が先行して12世紀後半に出現し，13世紀代には各群がそろう。14世紀代に入ると減少し，15世紀代に入るとほぼ消滅する。位置や存続期間からみて，この中世集落は後堀河天皇の皇女室町院の所領，糸岡荘の域内に含まれる可能性が強く，また中世村落の一形態を具体的にみることができる資料として貴重である。各建物群は数十メートルの間隔をあけて存立しており，集落形態はどちらかといえば散村形態に近い。これが現在みられるような典型的散居村に，歴史的にみてどのように繋がるのか，今後の課題である。

調査区南部のD地区では，明治時代前期に埋められたと推定されるゴミ穴が発掘された。この中からは江戸時代中期から明治時代前期までの陶磁器が大量に廃棄されていた。そこで特に注目されるのは，肥前や瀬戸美濃など各地産の陶磁器類に混じり，八尾町にある越中丸山窯の陶器類が相当量出土したことである。江戸時代後期に富山藩の庇護のもと焼物生産に力を注いだ越中丸山窯であるが，その内容については不明な点が多かった。近年窯跡灰原の一部が発掘されたり，本遺跡や梅原胡摩堂遺跡のように消費遺跡から当該製品が相当量出土するなど，少しずつ資料が蓄積されており，生産と流通の実態が発掘資料からも明らかになりつつある。

古代から中世の各遺構面では様々な地震痕跡が認められた。水平方向の断層によって，遺構上部と下部が横にずれた柱穴・井戸・溝，縦断層よる地層の上下のずれ，傾斜した柱穴，亀裂状の噴砂跡や隆起した礫層などが各所で検出され，地震災害の恐ろしさを物語っている。大地に残る地震痕跡や遺跡を広範囲に覆う洪水堆積層などにみられるように，何度も襲う自然災害が，そこに住む人々の生活に大きな影響を及ぼしたことは想像に難くないが，それでもなお繰り返し生活の場を復活させる人間の力には全く驚かされる。出現・発展・中断・復活・衰退の過程を繰り返す遺跡の消長が，このような自然の力と密接に関連していることを，改めて認識させられた五社遺跡の発掘調査であった。

（山本正敏）

報告書抄録

ふりがな	ごしゃいせきはっくつちょうさほうこく
書名	五社遺跡発掘調査報告
副書名	能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告
巻次	I
シリーズ名	富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第9集
編著者名	山本正敏　岡本淳一郎　中川道子　三島道子
編集機関	財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒930-0887　富山県富山市五福4384番1号　TEL0764-42-4229
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごしゃ 五社	おやべし 小矢部市 ごしゃ 五社	16209	170	36度 40分 53秒	136度 55分 12秒	19920720～ 19921227 19930419～ 19931208 19940518～ 19941025	38,100 6,209 6,990	道路（能越自動車道）建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五社	集落跡	古墳時代	竪穴建物4棟 溝4条 土坑8基	土師器	
		平安前期	掘立柱建物12棟 溝37条 土坑81基 道路状遺構	土師器・黒色土器・須恵器・製塩土器・土錘・木製品・石製品・金属製品	
		平安後期	掘立柱建物25棟 溝52条 土坑344基	土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・中国製白磁・製塩土器・土錘・木製品	
		中世	掘立柱建物48棟 溝113条 井戸5基 土坑209基	中世土師器・珠洲・瀬戸美濃・中国製白磁・青磁・染付・瓦器・木製品・石製品・金属製品	
		近世以降	溝10条 井戸4基 土坑9基	伊万里・唐津・瀬戸美濃・越中瀬戸・越中丸山・土製人形・木製品・石製品・金属製品	

1998（平成10）年３月15日　印刷
1998（平成10）年３月31日　発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第９集

五 社 遺 跡 発 掘 調 査 報 告

― 能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告Ⅰ ―

（第一分冊）

編集・発行　財団法人富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所
〒930-0887　富山市五福4384番１号
TEL. 0764-42-4229

印　　刷　北 日 本 印 刷 株 式 会 社
〒930-0094　富山市安住町７番36号
TEL. 0764-32-2126